

Beloved 研究：封印された名前

檜崎 健

A Study of Toni Morrison's *Beloved* : The Name Sealed in Their Minds

Narasaki Takeshi

Abstract

The purpose of this paper is to examine the identity of *Beloved* and the anonymity of the baby killed by Sethe. *Beloved* is the incarnation of the two spirits: the spirit of Sethe's lost child, and that of some slave girl who committed suicide after her many-year sexual abuse. Every character except Denver, however, believes in his or her own way that *Beloved* is the very reincarnation of Sethe's dead baby.

No one in this novel reveals the real name of the dead baby. This is one of the most important devices employed by Toni Morrison. The anonymity of the baby shows Sethe's baneful trauma and encourages the reader to consider the symbolic meanings lurking behind the anonymity.

Neither Sethe nor the dead baby will be saved as long as Sethe locks up the real name of her dead baby in her mind. This novel is, in a word, the story of the generations of daughters whose names were not called by their mothers. We can call and pray for the dead babies whose names we never know, by using the name of *Beloved* as their symbol.

序 論

本論の目的は、Toni Morrisonの代表作 *Beloved* (1987) にまつわる、二つの謎を検討することである。第一の謎とは、*Beloved*の正体である。彼女の正体は、Setheが殺した赤ん坊の霊と考えられがちだが、実際には必ずしもそうとはいえないし、また、ピラヴドをとりまく登場人物たちの彼女に対する認識にも、それぞれかなりのずれがある。ピラヴドとはいったい誰なのだろうか。第二の謎は、殺された赤ん坊の無名性である。124番地に突然現れた娘は、自らをピラヴドと名乗るものの、その名前はセテが殺した赤ん坊の名前ではない。娘の本当の名

前が最後まで明かされないのは、なぜなのだろうか。

実は、これら二つの謎は、作品の中核をなす問題、つまり、赤ん坊の霊は癒されたのか、セテは救われたのか、あるいは非業の死を遂げていった黒人奴隷たちに、我々読者がどのような姿勢を取るべきか、といった問題と深く関わっている。二つの謎を解明しながら、同時にこれらについても考察していきたい。

第1章：ビラヴドとは誰か

この小説の出版当初から、ビラヴドとはセテが殺した赤ん坊の霊が肉体を得て蘇ったもの、という読みは、ほぼ当然のこととして受け入れられたようである。例えば *New Yorker* 誌の書評で Judith Thurman はビラヴドに関して、“She calls herself by the name of the dead baby—Beloved—so there isn’t much suspense, either about her identity or about her reasons for coming back.” と述べ、ビラヴドの正体は、セテに殺された赤ん坊であり、その霊が復讐のためこの世へ戻ってきたという解釈を示した¹⁾。大方の読者もこのように考えるであろう。しかしながら、こうした読みには、問題がないわけではない。その独白に明らかのように、もしセテの娘であればもつはずのない、奴隷船に関する記憶を、ビラヴドは口にする(210-214)²⁾。このことを考えると、単純にビラヴドとはセテが殺した娘である、とは言えないことも確かなのである。この点については、これまた出版当初から、ビラヴドは奴隷となることを強いられた民族の、集団的記憶を代弁している、という指摘がなされていた。例えば Thomas R. Edwards は *New York Review of Books* で、“Beloved is all memory—hers seems to be a collective racial memory whose “personal” contents mingle with recollections of the Middle Passage from Africa.” と書いている³⁾。なるほど、ビラヴドの記憶には、アフリカから強制移住させられた黒人たちの集団的記憶がまざっていると考えれば、セテの娘なら言うはずがない言葉も、説明がつくようにも思われる。

もっとも、ビラヴドは亡霊のような超自然的な存在ではなく、生身の若い女性であるという解釈もないわけではない。Elizabeth B. House によると、おそらくビラヴドは母親と共に、アフリカで奴隷狩りにあい、奴隷船でアメリカに輸送され、船員によって性的な目的で特別に監禁されることになった。彼女の父親は奴隷船内で死亡し、また彼女は母親が船から身投げするのを目撃した。上陸後も監禁は続いたが、ビラヴドは結局逃げ出して、124番地に来たという⁴⁾。なるほど、この解釈にしたがえば、彼女が暗い所では“beloved”と呼ばれ、明るいところでは“bitch”と呼ばれたことや(241)、彼女が再三水のイメージを口にし、橋の上から小川を見つめ、水面に映った自分の顔を求めて水に飛び込むのも(212-3)、艦橋から母親が海に身投げするのを目撃した記憶によると説明できるように思われる。だが一方で、この解釈ではいくつもの矛盾が生じてしまう。例えばセテが赤ん坊を殺した時、頭が動かないように手で強く押さえつけたために、赤ん坊の額に3本の小さな爪あとが残った(202-3)。それと同じ爪あとが、ビラヴドの額にもあったのだが(51)、これを単なる偶然と考えるのは無理があるだろう。そして何よりも、セテに殺された赤ん坊とビラヴドをつなぐ決定的な証拠、つまり、セテが作

った——それゆえセテの子供しか知り得ない——子守り歌をビラヴドが知っていたということが説明できなくなってしまう (176)。

結局、ビラヴドとは、セテが殺した娘の生まれ変わりであり、同時に彼女の言葉には民族としての記憶も含まれている、と読むのが現在の大方の合意であるといっておいたろう。しかし、こと作品内の登場人物たちに限って言えば、セテ、Denver、Paul D らのビラヴド像は必ずしも同じではない。それぞれの人物が、自分の思い込みにもとづいてビラヴドを認識しており、それらのビラヴド像は誤解に満ちているといえるほどなのである。また、ビラヴドの独白を検討してみると、単に「民族の記憶」としてすませることができない特質があることもわかってくる。これらの点を、順を追って検討していくことにしよう。

(1) セテのビラヴド像

セテがビラヴドをどう認識し、彼女をめぐる、どのような思いを抱いていたかは、三段階に分けて考えることができる。第一の段階は、ビラヴドが124番地に突如現れてから、セテがビラヴドは自分が殺した娘と悟るまでだ。ポールDに名前を聞かれ、初めてビラヴドが名乗った時、セテは手に持っていた靴をぼとりと落とした (5)。偶然にも、その名前が、自分が石工に体を売って、墓石に彫らせた言葉と同じだったからだ。ビラヴドという名前ゆえに、セテは女にできるだけの世話をしやりたいという気持ちになる。“Sethe was deeply touched by her sweet name; the remembrance of glittering headstone made her feel especially kindly towards her.” (53) ビラヴドをいぶかしがるポールDとは対照的に、セテは彼女にやさしい言葉をかけ、食べ物と寝る場所とを与えることにする。そしてビラヴドが現れた状況や、彼女の様子から判断して、その身元については、セテの経験からすれば、“Beloved had been locked up by some whiteman for his own purposes, and never let out the door.” (119) となるのだった。ポールDが思ったのと同様に、セテにとっても、若い黒人の女があてもなくさまよっていたら、破滅から逃げ出してきたにきまっていたのである。

ビラヴドがセテの子守唄を知っていたことで、セテは殺したわが子が蘇り、ビラヴドと名乗って戻ってきたのだと確信する。ここからが第二の段階だ。セテがビラヴドは自分の娘だと気づくと、彼女の心の中に大きな変化が現れる。それまで、セテの最大の願いといえば、娘をみずからの手にかげざるをえなかった事情を、その霊に説明し、わかってもらうことだった。ポールDが追い出してしまうまでは、殺した娘の霊は124番地に出没し、ささやかな悪事をはたらき続けていた。セテ自身、そうした霊に手をやきながらも、罪の意識から “But if she'd only come, I could make it clear to her.” (4) と繰り返して言っていたのだった。だが、こうした気持ちは一変し、セテは殺した娘に対する罪の意識から解放される。彼女は娘があの世界からもどってきたという奇跡をまのあたりにして、「花嫁のように」(176) 2階の寝室へ上がっていき、「微笑みをうかべながら眠り」(181)、翌朝目覚めた時、「まだ微笑んでいた」(181)。そしてセテは、“I don't have to explain. She understands it all.” (183) というように、娘は自分を理解してくれていると繰り返すようになる。セテの “I didn't understand it then. I thought you were mad with me. And now I know that if you was, you ain't now because

you came back here to me and I was right all along.” (184) という言葉からも、娘が戻ってきたのは、自分のことを理解してくれていたからだ、と彼女が勝手に判断してしまっているのは明らかだ。こうして、ビラヴドの本心をよそに、セテは娘に対する負い目から解放され、満たされた気持ちとなる。

だがセテの幸福な誤解はほんのひとつきで終わり、第三の段階として、今度は逆に懺悔と償いの長い日々がやってくる。セテはデンバーなど存在しないがごとく、ビラヴドのみを溺愛するが、ほどなくビラヴドが不平を漏らすようになり、あげくのはてはビラヴドは、自分を置き去りにしたと言って、セテを責め立てるようになる (241)。一方セテはといえば、そんなビラヴドを諭すわけでもなく、ただ言い訳をして、許しを請うのみとなる：“Sethe pleaded for forgiveness, counting, listing again and again her reasons: that Beloved was more important, meant more to her than her own life.” (241-2)。しかし、ビラヴドはますます横暴に振る舞うようになる。次第にセテの精神も異常をきたし始め、もともたれもしないのに、自分から説明を延々とするようにまでなってしまう。

このように、ビラヴドの存在ゆえに、セテがそれまで心の中にしまいこんでいた自らの過去を語るようになることについて、例えば Linda Krumholz は、セテが過去の心の傷から癒されている過程と解釈している⁵⁾。しかし、過去を語ることで癒されるとすれば、聞き手がその語りを認め、受け入れる場合だろう。セテに関して言えば、いくらセテがつらい過去の事情を語ろうと、聞き手のビラヴドは反発し、セテをなじり続けている。セテが過去を語れば語るほど、袋小路に追い込まれているのは明らかだ。一般的に言えば、「過去を語ること」は「癒し」につながる人が多いのだろうが、テキストを読む限り、セテの場合には、それが彼女自身の癒しにつながっているとは考えにくい。

語れども許されず、癒されないからこそ、セテに残された道は、自分自身を罰し続けること以外にない。“It was as though Sethe didn’t really want forgiveness given; she wanted it refused.” (252) かつてセテは、赤ん坊を殺した事情をポールDに語った時、母親が子供たちを護る務めについて、“It ain’t my job to know what’s worse. It’s my job to know what is and to keep them away from what I know is terrible. I did that.” (165) と、誇り高く説明した。しかし、現実には、その後セテがビラヴドにいくら事情を説明しても、娘は母を許さなかった。セテはこの体験をつうじて、娘を殺した行為は弁解不可能と悟ったのである。こうしてセテの望みは、ビラヴドの責めを受け続け、自らの命を娘に捧げることだけとなり、実際、そうしたのであった。

セテのこの望みは、彼女自身の一瞬の錯乱により、かなえられないままで終わる。結末部分の場面がそれだ。Bodwin 氏を Schoolteacher と勘違いしたセテは、19年前と同じく、反射的に襲いかかる。だが、今回襲いかかる対象は、我が子ではなかった。以前は、我が子を白人から護るために、我が子を殺した。しかし今度は、我が子を護るために殺そうとした相手は、白人のほうだった。もし、かつてセテがポールDに話した母の務めへの確信にいささかも揺るぎがなかったのなら、セテは白人ではなく、再びビラヴドに襲いかかったはずだ。心の中で“what she [I] had done was right because it came from true love” (251) と信じていたの

に、セテがそうしなかったのは、それまで半年あまり、生身のビラヴドになぜ置き去りにしたのかと、責め続けられていたからだろう。セテがいくら説明しても、ビラヴドはわかってくれなかった。だからセテは再びビラヴドを置き去りにするわけにはいかず、白人のほうをあの世へ送ろうとしたのだった。

だが、この行為によって、セテが何らかの救いなり、癒しなりを得たとは考えにくい。実際、ビラヴドが消え去ったあと、セテはかつての Baby Suggs のように、生きる気力をなくして床に臥してしまった。ポールDがたずねてきた時、部屋の中は荒れ放題、セテの体は異臭をはなっており (272)、あまりに無表情になっていた (271)。そして、セテはビラヴドのことを思い出し、“She left me” (272) とポールDに泣きながら語る。セテにしてみれば、ビラヴドは彼女の説明を聞き入れることもないまま、彼女を置き去りにしてしまったのであった。一方、皮肉なことに、ビラヴドも、また置き去りにされたと感じていた。セテが全身全霊をかたむけた行為は、ビラヴドの目には、母親によって繰り返される裏切りと映った。ビラヴドと手をつないでポーチに立っていたセテは、ボドウィン氏を見るや、彼に襲いかかっていったが、集まっていた女たちに取り押さえられた。だが、その時ビラヴドは、セテが彼女を護るために白人に向かっていったとは思わず、逆に、“Now she [Sethe] is running into the faces of the people out there, joining them and leaving Beloved behind. Alone again.” (262) と感じていたのだった。

(2) デンバーのビラヴド像

かつて家に出没していた赤ん坊の霊と、その後突然現れたビラヴドが両方とも、自分の姉、つまり、殺された赤ん坊の霊であると確信していた、という点ではデンバーはセテと同じである。ただ、霊の存在を感じ取る力については、むしろデンバーがセテより上とあってよい。姉が殺された時、その血をセテの母乳と一緒に飲んだからか、それとも、世間から隔絶された暮らしを強いられ、また、二年間聴力を失い、感覚が研ぎ澄まされていたためなのかはわからない。だが、いずれにせよ、“Look like I was the only one who knew right away who it was. Just like when she came back I knew who she was too.” (208) とデンバー自身が言うように、彼女は124番地に赤ん坊の霊が、現れると同時に、それが自分の姉であることに気づいたし、また、ビラヴドが現れた時、それが自分の姉だと気づいたのも誰よりも早かった。

姉同様に、母が自分を殺すかもしれないという恐怖と、母によって強いられた孤独に長年苦しんできたデンバーにとって、肉体を得て帰ってきた姉は、かけがえのない存在となった。ビラヴドについてデンバーが、“my sister come to help me wait for my daddy” (208)、あるいは“I have to protect her.” (206) と語るように、彼女からすれば、ビラヴドは、母の脅威から守るべき姉であり、一緒に父 Halle の帰りを待つために自分の所へもどってきてくれた姉だった。

デンバーの考えに変化が現れるのは、ビラヴドが消えてからだ。生きる気力をなくし、かつてのベビー・サグスのように寝たきりになっていたセテは、相変わらずビラヴドは我が娘だと思っていた。だが、そのころデンバーは、ボドウィン兄妹をはじめとする、彼女を応援して

くれる人々の愛と、弱った母を支える誇りとによって、未来への希望と自信をもって暮らし始めていた。Stamp Paidも、そうしたデンバーを見て“*I'm proud of her. She is turning out fine. Fine.*” (266) と誇らしげに語った。大人としての知恵と自信を身につけたデンバーは、距離をおいて過去を見つめなおすことができるようになり、ビラヴドにまつわる強烈な体験についても、時間をかけて、冷静に考え直していたようだ。こうして、ビラヴドは自分の姉と信じて疑わなかった彼女の考えに変化が訪れる。町で偶然再会したポールDからビラヴドについて、“*You think she sure 'nough your sister?*” (266) と尋ねられ、デンバーは自分の靴に目を落としながら“*At times. At times I think she was—more.*” (266) と言いかけて口ごもる。それ以上語りはしなかったものの、デンバーは、ビラヴドはもはや死んだ姉の亡霊にとどまらない、何かもっと多くの何かではないかと感じ始めていたのだった。

(3) ポールDのビラヴド像

ポールDのビラヴド像は途中で大きく変化する。彼は、セテとデンバー以外の人間でビラヴドと交流があった唯一の人間だが、彼にとって、ビラヴドは最初から異様な存在だった。彼が124番地で暮らし始めたころ、彼のビラヴドについての印象は“*This girl Beloved, homeless and without people, beat all, though he couldn't say exactly why, considering the colored people he had run into during the last twenty years.*” (66) というものだった。また、彼女が消え去ったあとでも、彼女のことを思い出しながら、スタンプ・ペイドに“*First minute I saw her I didn't want to be nowhere around her. Something funny about her. Talks funny. Acts funny.*” (234) と語っている。彼がそのように感じた理由は、これまでどんな女性の心も開いてきた彼に、ビラヴドだけが何の反応も示さないし、なにより、ビラヴドが現れた頃合いが、あまりに出来すぎているタイミングだったからだ。彼の人生がようやくまともになろうとする時に、よりによって忽然と現れ、邪魔し始めたのだ。注意すべきは、この段階では、彼がビラヴドのことを異様と感じているのは、生身の人間として異様ということであって、ビラヴドがあつた世からやってきた存在のように思われるので異様、ということではないということだ。彼は彼女の正体をつきとめようと決心するが、あくまで、この世の人間であるということが前提となっている。“*Paul D decided to place her. Consult with the Negroes in town and find her own place*” (67) とあるように、彼がビラヴドの家を捜そうとしていることから明らかだ。死んだ人間の霊が肉体をもってこの世に蘇るというのは、彼の想像の範囲をこえることだった。

だからといって、ポールDが霊の存在を感じない人間だったというわけではない。現に、124番地の家に初めて足を踏み入れたとたん、彼は悪霊の存在を感じ取ったし、“*red and undulating light*” (8) を通り抜けた時、それがセテの言うとおりの悪霊ではなく、ただ嘆き悲しんでいることを感じ、彼自身も声をあげて泣きたくなっている (9)。しかも、彼は、セテとデンバーが苦しめられていると知るや、“*Leave the place alone! Get the hell out!*” (18) と叫んで、その霊を家から追い出しさえるのだ。また、シンシナティの食肉処理場で働いた後、帰り道に通る古い共同墓地では、マイアミ族の死者たちのざわめきを耳にしている。このよう

な霊を、彼は存在しうるものとして、ありのままに受け入れている。

ビラヴドに対するポールDの認識に変化が起こるのは、彼がどうしても抵抗できないこと、つまり、124番地の家の中を、何らかの力によって無理やり移動させられる苦しみを体験してからだだった。あげくのはて、彼は冷蔵小屋の中でビラヴドに誘惑され、心ならずも肉体関係をむすんでしまう。“something is happening to me, that girl is doing it” (127), あるいは“A grown man fixed by a girl? But what if the girl was not a girl, but something in disguise?” (127) と彼は自問し始める。この段階で、彼のビラヴド像がゆらいでいるのは確かだが、セテによって殺された赤ん坊と、ビラヴドとを結びつけて考えるまでには至っていない。その後ポールDは、スタンプ・ペイドからセテの過去を知らされ、124番地を去ってしまう。そして半年後に再び戻ってきた時は、ビラヴドはすでにいなくなっていたのである。

シンシナティの町に戻ってきて、ポールDはビラヴド消失にまつわるうわさを初めて耳にする。その結果、彼はビラヴドについての認識をあらため、ビラヴドは普通の人間ではなく、セテに殺された赤ん坊の蘇りだったかもしれないと考えるようになる。町で偶然デンバーに再会した彼が、“You think she sure 'nough your sister?” (266) と尋ねているのが、それを裏付ける。また、その後、彼は124番地を再訪し、そこに犬の Here Boy が戻ってきているのを見て、ビラヴドは本当にいなくなったと確信した。これも、彼がビラヴドはあの世からやってきた存在である、と認識するようになった表れだろう。当時、彼らの間では、犬は霊的存在に敏感な動物とみなされており、実際、ヒヤボーイはビラヴドが124番地に現れるやいなや、どこかへ姿をくらましたのだった⁶⁾。

だが最終的には、“As a matter of fact, Paul D doesn't care how It [Beloved] went or even why.” (267) とあるように、ポールDにとって、ビラヴドのことはもう大した問題ではなくなってしまう。彼が気にしていたのは、セテに対するそれまでの自分の振る舞いであった。自分が傷つけてしまったセテのほうが、ビラヴドよりはるかに重要であり、そのセテに会うために彼は町に戻ってきていたのである。彼はビラヴドのことをすでに忘れ始めているといってもよいほどだが、それを裏付けるのは、ビラヴド消失の経緯を聞いて、彼が別の意味でも何の動揺も感じなかったことだ。彼は町の人々から、ビラヴドのお腹がよく実ったスイカのようにつきだしていたこと (250) や、集まった女たちの目にも妊婦の姿のように映ったこと (261) も聞いたはずである。その彼は前年の秋にビラヴドに誘惑され、肉体関係を続けていたのだ。当然、彼はビラヴドが自分の子供を宿したかもしれないと連想しておかしくないはずなのに、そんなことはおかまいなしなのである⁷⁾。

(4) スタンプ・ペイドのビラヴド像

スタンプ・ペイドがビラヴドを目撃したのは、124番地の家の外から、セテとならんだ二つの丸めた背中として、窓越しに一度見かけたにすぎない。だが、スタンプ・ペイドはその後も人々の話をたよりに、最後までビラヴドは誰なのかを考え、自分なりの結論をだそうとする。「地下鉄道」の主力メンバーとして活躍し、シンシナティの黒人コミュニティを知り尽くしていると自負する彼にとって、身元のわからない黒人がいるということ自体が不安であったから

だ。彼は自分が見たものを信じて、現実的に問題を解決してきた男だったから、ビラヴドも誰かの霊が肉体を得て蘇ったものなどではなく、この世の誰かであるはずだった。ビラヴドは幽霊かもしれないという Ella に対して、彼は “Your mind is loaded with spirits. Everywhere you look you see one.” (188) といさめる。エラは “You know as well as I do that people who die bad don’t say in ground.” (188) と反論するが、熱心なキリスト教徒であるスタンブ・ペイドは、キリストの復活を思い出し、さらに言い返すことは控える。しかし、キリスト教徒にとって、あの世から復活できるのはキリストただ一人である。キリスト教徒としても、彼は一度死んだ者が蘇るといことは認めにくい。そうして彼の結論は、“[She] Was a girl locked up in the house with a whiteman over by Deer Creek. [I] Found him dead last summer and the girl gone. Maybe that’s her.” (235) に落ち着く。

だが、女たちが124番地に集まり、皆が確かにビラヴドを目にし、そしてビラヴドは彼女らの前から消失したという話を耳にした後は、長年の同志エラを信頼するがゆえに “I trust Ella anyway.” (265) と言って、ビラヴドは赤ん坊の霊が蘇ったものだったと認めようとする。それでも、自分を納得させるために、“But from the way they describe it, don’t seem like it was the girl I saw in there. The girl I saw was narrow. This one was big.” (265) と語り、自分が124番地で窓越しに見たあの背中の女性は、ビラヴドとは違う人物だったのだろうと結論するのだった。

スタンブ・ペイドは霊的な現象を全く認めないのかというと、そうではない。ただ、敬虔なキリスト教徒として、死者の復活という現象が彼になじまないだけなのだ。そのかわり、ポールD同様、あの世から聞こえて来る同胞の声にはなんら違和感をもっておらず、ありのままに受け入れる。124番地の家から聞こえる声も、彼はそのまま受け入れる。ポールDにセテの過去を知らせたために、セテを不幸にしたことを悔やみ、124番地を訪れたあの時、彼にとってそこから聞こえて来る様々な声は、“undecipherable language” (198) だったが、それでも “the mumbling of the black and angry dead” (198) であることはわかった。誰の声かは特定できないが、彼は喋っているのは同胞だと直感するのだ。それは “The people of the broken necks, of fire-cooked blood and black girls who had lost their ribbons” (181) の叫び声に他ならなかった。このことは、彼にとって起こりうること、納得のいくことだったので、124番地で窓越しに二つの丸い背中を見たあと、エラに会いに行き尋ねたのは、あの見知らぬ片方の丸い背中是谁かということであって、124番地から聞こえてくるざわめきの正体については何も尋ねようとしなかった。(184～188) その後、彼はセテを見舞うことをあきらめたため、ビラヴドを目にすることは二度となかった。しかし、ビラヴドが消えた後、彼が自分の目で確かめようと124番地を訪れたことは、彼がポールDに “I been past it a few times and I can’t hear a thing. Chastened, I reckon.” (264) と語ったことから窺い知れる。彼にとってビラヴドが誰だったのかということは、もはや解明すべき問題ではなくなっていた。かつて124番地で感じた霊のざわめきが、自分の耳に聞こえなくなった今、彼にとって事件は一応の決着をみたことになる。

(5) 町の女たちのビラヴド像

ビラヴドに会わないうちから、それが殺された赤ん坊だということを直感した人々もいた。シンシナティの黒人女性たちだ。ポールDとスタンプ・ペイドの二人の男たちが、どちらも人に言われるまでビラヴドがセテの殺した赤ん坊の生まれ変わりとは思いつかなかったこととは対照的である。

きっかけはボドウィン兄妹の家で働く Janey Wagon だった。彼女はベビー・サッグスが自由の身になってボドウィン家を訪れた時、すでにここで働いていた。デンバーは124番地を餓えから救うため、仕事をもとめてボドウィン家を訪れ、ジェイニーに家の事情を打ち明け、助けを請う。その時デンバーはビラヴドのことを、いつわって従姉妹と説明し、ジェイニーも、その場ではそれをはかるくうけながす。しかし、この時すでにジェイニーは殺された赤ん坊が蘇ってきたと直感していたのである。しばらくして、彼女はデンバーに、“Tell me, this here woman in your house. The cousin. She got any lines in her hands?” (254) と尋ねる。デンバーが “No” と答えると、ジェイニーは “I guess there’s a God after all.” (254) と言う。つまり彼女はビラヴドが殺された赤ん坊の生まれ変わりだとするなら、その娘は皺ひとつもないはずだと考え、そのことを確認したのである。実際、“She had new skin, lineless and smooth, including the knuckles of her hands.” (50) とあるように、ビラヴドは124番地に初めて現れた時、年の頃18歳ほどでありながら、赤ん坊のような肌をしていたのだった。

デンバーから得た話を、ジェイニーが他の黒人の女たちにひろめると、それは噂となってひとりあるきをした。Lady Jones のように噂を信じなかった者もいたが、後に124番地に共に向かうことになる30人ほどの女たちにとって、“Sethe’s dead daughter, the one whose throat she cut, had come back to fix her.” (255) という噂は、噂でなく事実となり、問題はセテを救うかどうかに移っていった。

そうした女たちのリーダー格であるエラにとっても、ビラヴドが、セテが殺した赤ん坊の霊であり、母親に報復するためこの世に戻ってきたのは、疑う余地のないことだった。白人の父に飼われ性の玩具にされ続けていた過去をもつエラは、過去の記憶が現在におよぼす影響の恐ろしさを、誰よりも理解していた。“Ella didn’t like the idea of past errors taking possession of the present.” (256) とあるのも、そのためである。エラは幽霊を敬ったが、ビラヴドのように、人の姿をして現れ、生身の人間を苦しめるなら、それをこの世への “invasion” (257) と呼び、忌み嫌った。セテの救出に消極的な仲間からの “You can’t just up and kill your children.” という言葉に対し、エラは “No, and the children can’t just up and kill the mama” (256) と答えて、女たちをセテ救出のため124番地に向けて出発させたのだった。

エラも含め、124番地の前に集まった女たちは、その時初めてビラヴドを目にする。彼女らの祈りの声に気づいたセテと共に、ビラヴドはポーチに姿を現したのである。そのあと起こった出来事の一部始終を目撃したこの女たちは、それぞれがそれぞれなりに出来事を解釈し、そして事件の噂はひろまっていった。その内容は様々だったが、ポールDによれば、ただ一つ女たちのうわさで一致していたのは、“first they saw it and then they didn’t” (267) という点だった。かくして、復讐のため蘇った赤ん坊が、女たちの祈りによりこの世から姿を消したと

いう噂が町にひろまっていった。

このようにみえてくると、物語の登場人物たちの中で、ビラヴドにセテが殺した赤ん坊の霊以外のものを感じたのはわずかにデンバーただ一人だったということがわかる。しかも、そのデンバーでさえ、事件が終わり、落ち着いてそれを振りかえるようになってから、ポールDにビラヴドは姉さんだったと思うかと聞かれ、“At times. At times I think she was——more.” (266) と言って口ごもったように、具体的にはそれが何であるかわからないままである。スタンプ・ペイドは124番地の家のそばで民族の声を感じたが、その声がビラヴドと関係するとは少しも考えなかった。

また、セテを除けば、これらの人々は、ビラヴドのことを不思議なほど早く、忘れ始めていた。デンバーはもちろんビラヴドのことを覚えているが、彼女の気持ちはすでに自分の未来に向かっていくから、ビラヴドについて最初と同じように心に留めているのはセテのみとってよいだろう。ポールDとスタンプ・ペイドにとって、ビラヴドはすでに関心事ではなくなっていた。124番地に集まった女たちも同様だ。“They forgot her like a bad dream. After they made up their tales, shaped and decorated them those that saw her that day on the porch quickly and deliberately forgot her.” (274) 異様な出来事が終わった今、人々はそれを記憶のかなたに押し込めようとしていた。

第2章 ビラヴドの独白

ビラヴドの声の中に、殺された赤ん坊以外の声を聞き取ることができるのは、読者のみである。なぜとって、それが彼女の独白の中に現れたのは、124番地が完全に外界から遮断された時だったからである。具体的にいえば、セテの過去を知ってポールDが124番地を去り、そしてスタンプ・ペイドもセテを見舞うのをあきらめてしまう1873年の冬から、翌年の4月、デンバーが助けをもとめて家から外へ踏み出すまでの、およそ四ヶ月の間のどこかで、その独白はなされた。“124 was left to its own devices. When Sethe locked the door, the women inside were free at last to be what they liked, see whatever they saw and say whatever was on their minds.” (199) もちろん、セテとデンバーがビラヴドの独り言を耳にしたことは考えられるし、独白の章の最後の部分が三人による対話となっていることも見逃してはならないだろう (215-7)。だが、セテもデンバーも、ビラヴドは死んだ赤ん坊の生まれ変わりだと相変わらず信じて疑わず、それと矛盾するようなビラヴドの発言には気づかないか、あるいは無視してしまっているのである。

Part II 第4章のビラヴドの独白は、矛盾や飛躍に満ちているので、これに決定的な解釈を加えることは不可能と思われる。例えば Barbara Hill Rigney は、この独白部分を“an elliptical, fragmented, and purely poetic sequence of images” と評しているが³⁾、詩的であると同時に、まるで巫女やシャーマンがトランス状態で語っているかのような印象さえある。しかし、イメージの連鎖に注意していくと、断片的ではあるが強烈な場面が次第にはっきりと現れてく

る。また、続く第5章の独白の前半が、いわば第4章のまとめとなっているため、読者は全体的内容を、ある程度推測することができる。その結果として浮かび上がってくるのは、民族の集団的記憶というには、あまりに個別的で、生々しい体験なのである。

I am Beloved and she is mine. I see her take flowers away from leaves she puts them in a round basket the leaves are not for her she fills the basket she opens the grass I would help her but the clouds are in the way some who eat nasty themselves I do not eat the men without skin bring us their morning water to drink we have none at night I cannot see the dead man on my face daylight comes through the cracks and I can see his locked eyes I am not big small rats do not wait for us to sleep someone is thrashing but there is no room to do it in ... (210)

まず「わたしはビラヴド」にすぐ続いて「あの女はわたしのもの」と語られていて、それまでの物語の展開からすれば、ビラヴドがセテのことをさして言っているように思える。しかし、つづきを読むにしたがって、それまで声をひそめていた別の霊がビラヴドを通じて語ることがわかってくる。最初に語られているのは、奴隷にされた人々のふるさとアフリカのイメージだ。花を摘む母と娘のイメージはある種の楽園を思わせる。母を手伝いたいが雲に邪魔されるのは、何らかの別離を思わせるが、すぐにそれは白人によって奴隷にされ親子がひきはなされたものとわかる。ここで語る「わたし」=ビラヴドは、セテが殺した赤ん坊の霊ではなく、かつてアフリカで奴隷狩りにあった者の霊なのだ。トランス状態のビラヴドが、いわばシャーマンとして霊界との仲立ちをし、さらにもう一つの霊をこの世に呼び込んだのである。亡霊が亡霊を呼び込むという、奇妙な二重構造の中で、続く独白は一転し、中間航路を行く奴隷船内の地獄絵図が語られる。飢餓ゆえに自分の排泄物を食べる者、脱水症状、水のかわりに飲まされる白人乗組員の尿、痙攣しながら息絶える者。「わたし」が奴隷狩りにあい、奴隷船にのせられ、アメリカへ渡らされた記憶が蘇っている⁹⁾。

続いて、「わたし」は母に置き去りにされた様子を語る。父親はすでに船内で死亡し、甲板に積み重ねられた死体の山と共に、海中に投げ捨てられた。「わたし」の母は生きていたが、夫を追って海に身投げすることをえらぶ。「わたし」にとって、母に護られ、微笑みかけられるということは、すべての前提だったので、「わたし」は母親が自分を置き去りにして行った事実を受け入れることができない。母親の存在が自分の存在の前提であるということは、もしその母を失えば、自分自身の重要な一部を失うことになる。「わたし」はまだ幼いので、言葉にならないほどの喪失感を、“she goes in the water with my face” (212) というように、母親が自分の「顔」を持って行くとしか表現できない。同時に、突然母親を失った狼狽の裏返しとして、“I want to join”あるいは“I want to be the two of us” (213) のような言葉を通して、母親との一体化願望が繰り返し語られる。その願望は強烈で、“my face”は母親の人格そのものを表す言葉としても用いられ、“my face is mine”, “I have to have my face”あるいは

“I am loving my face so much” (213) のように、独白の中で繰り返されている。

母に置き去りにされた子供は女の子で、アメリカ上陸後、白人に監禁され、性の玩具にされたようだ。“he hurts where I sleep he puts his finger there” (212), あるいは “One of them was in the house I was in. He hurt me.” (215) などの独白がその手がかりとなる。セテは、始めの頃、ピラヴドの身元について、白人に監禁されていたのだろうと想像したし (119), スタンプ・ペイドも、ピラヴドは Deer Creek で白人の男に閉じ込められていた娘だろうと語っているが (235), 両者の推測はある意味で当たっていたといえる。さらに、二人がピラヴドのことを知るや、ただちに同様の推測をしたということは、この種の虐待が当時さほど珍しいものではなかったということを物語る。

「わたし」は何らかの原因で、監禁状態から脱出するが、橋の上から川面を覗き込んだ時、そこに映る自分の顔を母親の顔と錯覚する。川は、かつて母親が奴隷船から身投げした海のイメージともたぶるため、「わたし」は体を乗り出し、バランスを崩し川の中に落ちてしまったようだ。その後、「わたし」の肉体がどうなったかを、独白から判断することは困難である。ただ、「わたし」が岸に上がったのち、124番地にたどりつき、“Sethe’s is the face that left me” (213) と語っているところからすれば、川の中で溺れ死に、その肉体に、セテに殺された娘の霊と、「わたし」の霊が宿り復活したようにも思われるが、結局は謎というしかない。いずれにせよ、第4章の最後の数行と、続く第5章の独白の前半では、奴隷船で母を奪われた「わたし」の霊と、セテに殺された娘の霊が、いわば一つにとけあっていくことになる。奴隷船で母親に見捨てられた娘の怨念と、セテに殺された娘の怨念とが、一体化しているといってもよいだろう。

第3章：封印された名前

冒頭で指摘したように、セテによって殺された赤ん坊の名前は、最後まで明かされない。これまで、このことは言及されることはあっても、それ以上検討されることはなかったし、先の Thurman のように、赤ん坊の名前は Beloved だと思い込んでいる読みさえあった。しかし、名前が伏せられたままである、という事実は見過ごすことはできない。考えてみれば、これは実に不自然だからだ。まずセテについて言えば、なぜ母親なのに、彼女は自分の子の名前を口にしないのか。四人の子供のうち、Howard, Buglar, デンバーに関しては、彼女は母親が当然そうするように、幾度となく名前で呼びかける。しかし、殺した子の名前に限って、なぜか一度も口にしない。親の情としては、むしろ一日たりともその名前を思い出さない日はない、というのが自然ではないのか。赤ん坊の埋葬の時、牧師が言った“Beloved”という言葉、セテは “the one word that mattered” (5) と考え、石工に体を売ってまで墓石に掘ってもらった。そのかわり、娘の本当の名前は忘れてしまったとでもいうのだろうか。

生き残った他の子供たちも同じだ。兄のハワードもバグラも殺された妹の名前を言わない。兄弟たちは、死んだ赤ん坊の名前を知らなかったのか？ あるいは、そもそも赤ん坊には名前が与えられていなかったのか？ そんなはずはない。デンバーは、母親より早くピラヴドが自

分の姉だと気づいたことを誇りにしながら、“Not right away, but soon as she spelled her name—not her given name, but the one Ma’am paid the stonemason for—I knew.” (208) と語っている。デンバーは赤ん坊が生まれた時、つけてもらった名前を知っているのだ。しかし、彼女もその名前については沈黙する。

ビラヴドについても奇妙に思える。もし子供がはるばる母親をたずねてきて、自分の子と気づかない母親に名前を問われたら、まず親から与えてもらった名前を名乗るのが普通だろう。初めて124番地に現れ、“What might your name be?” とポールDに名前を問われた時、彼女は“Beloved”と名乗り (52)、最後までその名前で通した。死んだ姉の本当の名前を知っているはずのデンバーが、ビラヴドに“Why you call yourself Beloved?” と尋ねた時は、ビラヴドは“In the dark my name is Beloved.” (75) と答え、やはり本当の名前は言わない。仮に、セテが自分の子供と気づくかどうかで、セテの愛をためそうとしてしばらくは本当の名前を隠すにせよ、次第にまともな精神状態ではなくなり、自由に奇怪なものを見、心に浮かぶことを独白する状況ともなれば (199)、自分の名前くらい漏らしそうなものだが。

一見すると奇妙なこの状況は、実は作者モリスンの仕掛けによって、意図的に作り出されたものである。そしてその仕掛けとは、彼女がこの物語の中に作った様々な仕掛けの中でも、中心に位置していると考えられる。もともと、この物語は、時間的にも、空間的にも錯綜した構成になっている。そこで読者は、この物語を読む時、全体に散りばめられて語られる情報を、時間的に、空間的に行き来しながら、まるで頭の中でジグソーパズルを組み立てるかのように、物語を再構成していくことになる。しかし、パズルを完成させるための肝心の1ピースが、作者の手によって最初から意図的に取り除かれているのだ。言うまでもなく、その1ピースとはセテが殺した赤ん坊の本当の名前のことであり、それが欠けているがゆえに、読者はパズルとしてのこの物語をどうしても完成させることができない。それと同時に、読者は赤ん坊の名前が伏せられていることにいったん気づくと、なぜ伏せられているのか、その意味を考えざるを得なくなる¹⁰⁾。

では、この仕掛けは登場人物たちにとって、どのような意味をもっているのだろうか。ひとこと言えば、この仕掛けにより、登場人物たちが、ひとしく、赤ん坊の名前を心の奥底に封印しているという状況が作り出されているのだ。誰も殺された赤ん坊の名を語らないという一見奇妙な状況も、物語内部の世界で考えれば説明がつく。たとえば、セテは忘れたい過去をビラヴドやポールDのために、一旦はほとんど思い出し、語ったかに見える。しかし、彼女にとって最もつらい体験に関する、肝心の一言、つまり、赤ん坊の本当の名前は、それを思い出すと現在の自己が破壊されるほど悲しくつらいものゆえに、心の奥底にしまわれたと考えられる。なるほど、セテが石工に自分の体を売ったあの10分間は、何よりつらい体験だったかのように語られている：“those ten minutes she spent pressed up against dawn-colored stone studded with star ships, her knees wide open as the grave, were longer than life, more alive, more pulsating than the baby blood that soaked her fingers like oil” (5)。だがそれは彼女がそう思い込んでいるにすぎない。実際は逆で、彼女が赤ん坊の喉を鋸で切った時、あふれだした血の記憶は、はるかに強烈だったはずだ。そしてその記憶は彼女自身を破壊するほどの心の傷

となったので、その傷に直結する赤ん坊の名前は、無意識のうちに心の奥底に封印されてしまったのである。だからこそ、墓石に彫った“Beloved”という言葉は口にだせるが、自分の子の本当の名は口にだせない。同様にベビー・サグズも、セテの他の子供たちも、スタンプ・ペイドも、エラも、町の仲間たちも、それぞれが、意識的であれ、無意識的であれ、赤ん坊の名前を胸の中にしまいこんでいる。おそらくベビー・サグズはセテへの思いやりから、デンバーは母への恐れから、スタンプ・ペイドを始めとする町の人々は嫌悪や恥辱の思いから、それぞれが沈黙したのである。

セテは何度もビラヴドに許しを請い、説明し、最後には錯乱し、白人のポドウィン氏に襲いかかって行きさえた。だがそれでも、彼女は心の奥底の封印を解いて、赤ん坊の名を口にすることはなかった。心の封印を解いていないということは、セテはいまだ救われてはいないということだろう。物語の終わりには、ポールDがセテのもとに戻り、彼女を癒す。彼の言葉からは、二人が夫婦となり、人生をやり直す希望さえ感じさせる。だがそれでも、彼女は心の肝心の部分を閉ざしているため、苦しみの根本部分は何も癒されていないのだ。しかも、先に指摘したように、彼女は自分はビラヴドに結局捨てられた、と思っている。娘の霊に殺害理由を説明し、わかってもらいたい、というセテの切なる願いは、かなえられないまま終わっているのだ。仮にポールDと、あらたな人生を歩み始めたとしても、彼女の心の封印が解かれない限り、彼女が本当に癒され、救われることはないであろう。

一方、最後まで本当の名前を呼んでももらえないビラヴド、つまりセテの赤ん坊の霊は、母から自分の名前を呼んでもらう、という親子関係の核となるべき体験を与えられていないといえる。ビラヴドがセテのことを、最後まで“ma'am”とも“mother”とも呼ばないのも、その満たされない思いゆえなのだ。子供が最初に覚える言葉の一つは、普遍的に「母さん」であるはずなのに、名前を呼んでももらえないから「母さん」と呼び返すこともできない。奴隷船で母に見捨てられた子供の霊も、独白の中で“there is no one to want me to say me my name” (212) と言って、名前を呼ばれない不満を表している。

この世に生をうけた赤ん坊が、将来健全に成長していく過程で、母親または、それに相当する存在の影響はきわめて大きい。もちろん、ただ存在すればいいというものではない。子供に注がれるべき愛が満たされ、初めて子供の心は安定する。だとすれば、ビラヴドはセテを目の前にしてはいるが、いつまでたっても心が満たされることはあるまい。なぜとって、セテはビラヴドに命がけで愛を注ぐとはいえ、その愛には決定的なものの一つ——名前による呼びかけ——が欠落したままだからだ。こうした意味での母親の存在の重要性について、斎藤学は以下のように述べている。

ある人の人生とは、その人の回想のことである。個々の記憶の内容が、前後関係を位置づけられて並んだものが、その人の考える自分の人生であり、つまり自分自身である。とくに、母親の記憶は、母親の雰囲気、言葉、まなざし、それらのすべてがその人の人格そのものを特徴づける¹¹⁾。

殺された赤ん坊は、母親の記憶をもとに、この世に戻ってきた。殺害されてから、ビラヴドの肉体を得るまでの18年間、母の記憶は完全に空白だ。この世に戻ってきて、人としての生を望むなら、まずは失われた18年間の母の記憶、いいかえれば人生の記憶を、取り返そうとするだろう。実際、この空白を一刻も早く埋め尽くさねばならないかのごとく、ビラヴドは貪欲にセテの愛情をもとめる。しかし、肝心の愛の言葉——人格のよりどころとなるべき自分の名前——が与えてもらえないのである。

こう考えると、ビラヴドに宿る霊は、最初から、ビラヴドが消失する場面で行き場を失う運命だったことがわかる。なぜとって、自分の名前を呼んでももらえない亡霊は、この世に未練があるから、あの世に戻ることはできないし、かといって、セテを始めとする、登場人物たちの封印された心の奥底には入れないからだ。セテに殺された赤ん坊の霊は、ビラヴドに宿って124番地に現れた時より、いっそう怒っている。最後まで名前は呼んでももらえなかったし、あげくのはて、セテはまた自分のことを置き去りにし、黒人の女たちの中へ走って行ってしまったからだ。セテを母親と思い込んでいる、もう一つの霊も同じ思いをしているはずだ。語り手が最後に“Down by the stream in back of 124 her footprints come and go, come and go.” (275) と語るように、ビラヴドの霊はまだ満たされぬ思いを抱きつつ、この世をうろついているのだ。

結 論

結局、これは子供が母から名前を呼んでももらえない民族の物語だった。奴隷の子供として生まれる限り、母を奪われる運命は避けられない。そうなれば、人間としての原体験、つまり、母から名前を呼ばれる幸福もまた奪われ、「母さん」と母に呼びかける喜びも奪われるのだった。奴隷船の女は「わたし」を置き去りにして海に身を投げた。セテの母親は、セテ以外のすべての子供を海に投げ捨て、さらにはセテを置き去りにして逃亡した。ベビーサグズには八人の子供がいたが、全員奪われた。セテと同様、エラも我が子を殺した。白人に強姦されて産まれた子供だったから、エラは頑として乳を与えず、その赤ん坊は5日後に死んだ。その子の名前もまた語られなかった。産んですぐに殺すつもりで赤ん坊に名をつける母親はいないのだろう。そしてビラヴドに宿ったのは、セテに殺された赤ん坊の霊と、奴隷船で母を奪われた子供の霊だった。

こうして、ビラヴドという名前は、いつのまにか読者にとって、奴隷制度の中で母を奪われた子供を、象徴的に表す名前となっていく。忘れられるものなら忘れてしまいたいが、風化させてはならない過去を、この物語はみごとに描いてみせた。奴隷制度の犠牲となった子供について、読者はリアルに想像できるようになった。しかし、そのことによって、母から愛されるべきだったのに、愛されないまま歴史のかなたへ消えていった無数の子供たちの霊が癒されることは決してない。それらの霊は確かに存在するのだが、未来永劫、名前を呼んでももらえないまま漂い続けるからだ。物語の最後に、ビラヴドについて次のように語られるが、これはそのまま、奴隷制度の中で消えていった子供たちの霊にあてはまる。

Everybody knew what she was called, but nobody anywhere knew her name. Disremembered and unaccounted for, she cannot be lost because no one is looking for her, and even if they were, how can they call her if they don't know her name?(274)

人々から忘れられ、捜されもしない霊は、それが迷子になっていることさえ、気づかれない。たとえもし捜すにしても、名前がわからなければ、捜しようもないだろう。しかし、私たち読者は今、ビラヴドという名前は知っている。私たちは犠牲になった子供たちを、それぞれの名前を呼びながら、捜し、そして癒してやることはできない。だが、本当の名前ではないと知りつつ、死んでいったその子たちを弔うための名前を私たちは得たのである。

ビラヴドという存在、そしてセテに殺された赤ん坊の無名性は、この点において、物語の題辭に引用された、新約聖書『ローマ人への手紙』の一節と呼応する。“I will call them my people, which were not my people; and her beloved, which was not beloved.”『手紙』の中で、神のもとでは Jews と Gentiles の区別はない、とパウロが繰り返したことを思い出そう。ビラヴドの物語を読むことで、私たちは奴隷制度を単なる過去の歴史としてではなく、同じ人間として、その痛みを生々しく想像し、共有できるようになるだろう。この物語は読者にとっても、特定の民族の物語ではなく、“my people” の物語となるのだ。さらに、読者は Beloved という名を知ったことにより、セテの娘も含め、奴隷制度により母親の愛を奪われ、名前と共に忘れられていった子供たちの霊全体に、Beloved (「愛されし者」) と呼びかけ、そして祈りを捧げることもできるであろう。

註

- 1) Judith Thurman, “A House Divided,” *The New Yorker*, 2 November 1987, 175-80. Thurman は、殺された赤ん坊の名前は Beloved だとしている。だが、本論第3章で示すように、これは正確ではない。
- 2) Toni Morrison, *Beloved* (New York: Knopf, 1987). 以下、このテキストへの言及およびテキストからの引用は、該当するページ数を本文中に () で示す。また、説明上、適宜邦訳を使用しているが、吉田迪子訳『ビラヴド』(集英社)を参考にした。
- 3) Thomas R. Edwards, “Ghost Story,” *The New York Review of Books* 34, 5 November 1987, 18.
- 4) Elizabeth B. House, “Toni Morrison’s Ghost: The Beloved Who Is Not Beloved,” *Studies in American Fiction* 18, no.1, Spring 1990: 17-26.
- 5) Linda Krumholz, “The Ghost of Slavery: Historical Recovery in Toni Morrison’s *Beloved*” in *Toni Morrison’s Beloved* (New York: Oxford University Press, 1999), 107-125.
- 6) Trudier Harris, *Fiction and Folklore: The Novels of Toni Morrison* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991), 163.
- 7) ビラヴドのこの体型について、「トニ・モリスンはビラヴドの欲望の充足状態を、妊娠している女性の「身体」の比喩によって、いかなる抽象的な言葉の羅列よりも、効果的に描いている」(藤平育子『カーニヴァル色のパッチワーク・キルト：トニ・モリスンの文学』, 196) と考えることもできる。しかし、ポールDとビラヴドの現実の関係がある以上、ビラヴドが文字通り妊婦になった可能性は指摘されるべきだろう。

- 8) Barbara Hill Rigney, *The Voices of Toni Morrison* (Columbus: Ohio State University Press, 1991), 74.
- 9) Devorah Horvitz のように、この「わたし」とは、セテの母親の霊であると特定する解釈もある。しかし、そう考える場合、海に身投げする女性は、セテの母親の母親とならざるを得ず、説明はより複雑になる。Devorah Horvitz, “Nameless Ghost: Possession and Dispossession in *Beloved*,” *Studies in American Fiction* 17, no.2, Autumn 1989: 157-167.
- 10) モリスンは自らの作品について、読者が直感的に何かを感じ取り、著者と経験を共にできるように、意図的に空白を設けていると述べている。“My language has to have holes and spaces so the reader can come into it. He or she can feel something visceral. Then we [you, the reader, and I, the author] come together to make this book, to feel this experience.” Daniel Taylor-Guthrie ed., *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: the University Press of Mississippi, 1994), 164.
- 11) 斎藤学『封印された叫び：心的外傷と記憶』（講談社、1999年）、19。